

## 西鶴存疑作『浮世栄花一代男』論-虚実の二つ-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18088">http://hdl.handle.net/10291/18088</a>

## 西鶴存疑作『浮世栄花一代男』論

——虚実の二つ——

徳田 武

『浮世栄花一代男』（元禄六年、一六九三、京、松葉屋平左衛門等刊）は、「元禄六のとしの春／松寿軒／西鶴□」の序を備えており、それに拠って西鶴作とする説（野間光辰著『刪補 西鶴年譜考証』）があり、一方、従来の西鶴作に用いられない語彙が散見することから、これに疑いを差し挟む説（暉峻康隆『定本西鶴全集』第十四卷解説。『西鶴研究ノート』）もあり、西鶴作品と断言することが難しいものである。近年は、これを西鶴作とする説が多い（中村幸彦『中村幸彦著述集』第四卷・前田金五郎『日本古典文学大辞典』）ようであるが、私はなお、そうとは言いつれないという感触を抱いている。要旨だけを言っておくと、西鶴自身が書いた作品の外に、門人などの助作・代作に西鶴が手を入れた作品も少なくはない、というものだ。しかし、いずれにしても決定的な根拠が見出せない今、この問題に深入りすることは、控えておきたい。

本論では、西鶴が序に述べている「虚実のふたつ」という句に着目することによって、その作品造りの方法の一端に迫りたい。前もって言う、虚とは虚構のことであり、実とは実在人物の面影を打ち掠めることであり、この二つの要

素を撮合することによって小説を形成している様相を確認しようとするものである。

一 「箆の鳥かやあかぬなげぶし」

鳥の巻二第三話「箆の鳥かやあかぬなげぶし」は、詩仙堂の隠逸者である石川丈山の面影を踏まえた作品である、と読む。その梗概は次のようなものである。

忍之介は祇園祭りも終る六月十四日頃、嵯峨の釈迦堂に到り、隠居所を見歩くが、「藪置きびしく外門はるかに奥深なる家作りあって、ことに栄花なる隠れ住」をしている者がいる。忍之介が傘で身を隠して、居間に通ると、「七十あまりの親仁」が「此の家の將軍らしき貌つき」で、十四、五人の美女に車を綱引かせ、その上に坐して、「跡からは唐団にて風を」招かせ、屋敷の内を廻っている。それは、「さながら見ぬ国の王院事してあそぶ」と思われる。忍之介がその夜のありさまを伺っていると、実行不能の老人は美女たちを相手に「手てんがう」するだけで、ことに嫉妬深く、暮れ方には戸に錠をおろさせ、男を入れないのだが、夜半過ぎに八重梅という女が出産する。老人は立腹して清滝というかしらに事情を糺すが、不明である。そこで、十四人いる下男どもを調べても埒が明かない。さらに調査すると、西の岡やくれなゐという女も妊娠している。小箆という女がみずから妊娠していると申し出たので、調べてみると実は男であって、大勢の女を妊娠させていたのであった。主人は女と手てんごうで「たはぶれ」るだけ、という内証を知って、このように企んだものであった。この男は子とともに川原町の親元へ帰されたが、忍之介はこれを観じて、「栄花に何程か美女集め置てもひとつもあきのなき事」で、これらの美女たちは



「籠の鳥かや」と投節を唄ったのであった。

右の梗概の内、「七十あまりの親仁」と言われている老人が石川丈山の面影を取り入れた人物像である、と考える。その理由は、第一に、「隠れ住み」している、つまり隠者である点が両者に共通しているからである。丈山は隠者として著名であり、それ故、西鶴も早く貞享五年（一六八八）二月刊行の『武家義理物語』巻三、第二話「約束は雪の朝食」で、

石川や老いの浪立つ影ははづかしと誑捨、今の都もうき世と見なし、賀茂山に隠れし、丈山坊は、俗性歴々のむかしを忘れ、詩歌に気を移し、其徳あらはるる道者なり。

と、その隠逸ぶりを懐かしく描いていた。ということは、西鶴の周辺にも丈山は隠者としてよく知られていたことを語るものであろう。そうとすれば、西鶴ないしは西鶴の周辺の人物が『浮世栄花一代男』で再び丈山を扱うことは、十分にあり得ることなのである。付け足していえば、「七十あまりの親仁」という設定も、丈山に該当するのである。七十余りという年齢は、当時にしてはかなりの高齢者であるが、周知のように丈山は、九十歳という長命を保った人である。両者のこうした高齢も共通しているのである。

第二に、「さながら見ぬ国の王院事して遊ぶ」という記述が、丈山の詩仙堂を暗示しているものと見られるからである。周知のように、詩仙堂には、雅趣豊かな庭園の内に数寄を凝らした建物が設けられ、その内には三十六人の唐土の詩人の肖像と、隸書によるその詩とが掲げられていた。そうした趣は、後に三橋成烈の『詩仙堂志』（四巻四冊、寛政

九年刊)に多数の図画をもって示されている。そのような丈山の唐風愛好を、「さながら見ぬ国の王院事して遊ぶ」と言った、と考えられるのである。

第三に、「竈の鳥」の挿絵の主人公像は、よく知られた「丈山寿像」を換骨脱胎したもの、と観ることができからである。上掲の二図の内、上のものが「竈の鳥」のそれであり、下のものが嘗て詩仙堂に存して、『詩仙堂志』にも掲載された「丈山寿像」(狩野探幽画・丈山賛)である。「竈の鳥」のそれは、隠居所の主人が大勢の美女に自らが乗った車を引かせる場面を描いたものであり、車上の主人は画面右に向いて左膝を立てて坐っている。「丈山寿像」のそれは、体は画面左を向き、帽子をかぶった顔は右に向け、右膝を立てている。服装は、両者ともに、いかにも隠者が着そうな、ゆったりとした寛衣または道服を着用している。つまり、左向きと右向き、左膝と右膝というような細部の相違は存するけれど、片膝を立てて坐る、という点では同一という、一見して直ちに類似を感じるような座像になっているのである。少なくとも「丈山寿像」を銘記している者が両者を見比べると、類似を感じるように出来ているのである。つまり、「竈の鳥」の主人公像は、「丈山寿像」の座像を基とした上で、それを多少画き変えたものと観ることができるのだ。

以上の事柄は、「竈の鳥」の主人公像は、石川丈山の人物像を踏まえたものだ、という事を意味するものである。一に隠者であり、長命である、二に異国の文雅な趣味を愛好する、三に片膝を立てた座像、という三点において、両者の人物像は共通しているのだが、それは「竈の鳥」の作者が意図して丈山像から取り込んだものだ、と言うことができる。単純化して言えば、「竈の鳥」は、石川丈山をモデルとした作品なのである。

## 二 虚実の方法

「籠の鳥」は、しかし、小説として作られたものであるから、実際の丈山像とは違う点も数多く存する。まず「籠の鳥」では、主人公が随分の女好きとして造形されている。彼は高齢ゆえに性的不能者であり、ために大勢の美女たちを相手にしても、「手てんがう」(手による戯れ)で済ますだけである。しかし、非常に嫉妬深く、他の男は家内に入れない。

こうした主人公像に対して、実際の丈山には、一時は雑髪して妙心寺に入り、その後も一生独身であった(『新編覆醬集』所載「丈山年譜」寛文十二年三月二十日の条に「生来妻無し、故に女子の側らに在るもの有らず」)ことも手伝って、却って女嫌い・衆道好きの巷説が付きまわっている。たとえば、西鶴の知人たる西鷺軒橋泉が著したという小説、即ち西鶴存疑作の一でもある『近代艶隠者』(貞享三年刊。西鶴序)一の二「花葉の翁 土器の翁」には、丈山のことが、

昔往公の命にしたがひ、上方表の戦にまかんでしに、かくれもなき功をなすといへども、己のが名譽を立んと思ひ、公の忠をおもはず、屯の法を破る兵家は、勇武を元とはすれど、是をよしとは云がたし。公慈心のあまり、しばらく咎を在宥たまひ、二度つかへん事を免し給へば、功成名遂の文にふけり、恩をわすれて身をかくし、蟬の小川の和歌を詠して、都の内へも出ず。此心また世の人をうとんで、己をたつる咎あり。夫文をまなび詩を唄ひ、和国の哥を尊むも、無我にもとづくのはしめたり。又天地は陰陽にはじまれり。人はそのめぐみによる。然るに妻といふ

名もなく、その身にいたりて末を絶たつもゆへなし。又愛を断捨たちすてて其もとに復かへかとおもふに、邪よこしまに小童を寵し…

と、独身で美童好きと述べられている。そして、野間光辰は、御丁寧にもこの寵童に「丈山の侍者平井仙木、号敬齋」と注を付けているほどである（『定本西鶴全集』第十四卷『近代艶隠者』注）。

こうして、実際の丈山には女嫌いで衆道好きというイメージが付きまとうのであるが、そうとすれば、「籠の鳥」は、それとは正反対な方向、つまり女好きに主人公像を造形しているわけで、そこに虚構が存することになる。のみならず、この主人公は、女好きである故に女に裏切られ、女で苦勞する。当時、もしも主人公像に丈山が踏まえられていることに気付いた読者がいるならば——その割合は、当時においては現代のそれよりもかなり多かつたのではないか——、この実際の丈山像とのギャップ（懸隔）に思わず哄笑を惹き起こすのではあるまいか。そして、この哄笑を惹き起こすところこそが作者の狙いであつたのではなからうか。

換言すれば、「籠の鳥」の後半部の、美女たちの妊娠、美女たちの内に男が紛れ込んでいた騷動、といった話は、ほとんど全てが虚構であろう。とすれば、「籠の鳥」の構造は、主人公像に就いては石川丈山の人物像という「実」を踏まえており、その好色、美女の妊娠、男の美女群への混入、といった話は「虚」である、というものであつた。つまり、「実」を踏まえながら「虚」を加える、という方法によって一編を構成させているのである。『浮世栄花一代男』の西鶴の序においては、

されば世界は広し。むさし野の恋種の中に住みながら、色しらずの男のありしを、陰陽の神の道びかせ給ひ、俄に浮世の栄花物語。是を見る人、虚実のふたつ有。時に移れる心にして見る事、同じ夢にも玉殿の手枕、しばしも榮



しみふかし。

と、本作には「虚実のふたつ」があることをわきまえて読むべきことを指摘しているが、それは、右に述べたような、虚実の撮合、という方法を用いていることを西鶴が明かしたものである。それと同時に西鶴は、「時に移れる心にして見る事」と、話を過去のものとして読むべきことをも説いているが、「籠の鳥」も、寛文頃の過去の人である石川丈山を扱っているのであり、この虚実と過去という二つの要素は、『浮世栄花一代男』の話の方法を解明するための二つのキーワードである、と言えよう。

そこで、以下に私は、この二つのキーワードを運用することによって、本作の幾つかの作品の方法を解明して行きたいのであるが、今回は時間の余裕を得ない。差し当たって「籠の鳥」のみに止めて、次の機会を待つこととする。

(未完)

(とくだ・たけし 法学部教授)